

民國佛教期刊文獻集成

補編

任繼愈題



B94  
223  
:54

# 民國佛教期刊文獻集成補編

任繼愈題

## 第 54 卷



日華佛教  
袈裟周刊  
淨土宗月刊  
佛教月報（天津）

中國書店

昭和拾年十二月三十日印刷納本  
昭和拾壹年一月五日發行

# 日華佛教

第一  
—  
號 卷

日華佛教學會發行



(氏宣草井藤はるて立) 式會發會學教佛華日  
館會通傳川石小京東於 日一十月七年十和昭

日華附屬學會發計

# 日華佛教 第一號 目次

|                      |      |      |      |
|----------------------|------|------|------|
| 日華佛教學會創立ノ趣旨          | 會長   | 柴田一能 | (一)  |
| 中華佛教視察記              |      | 藤井草宣 | (九)  |
| 四段階を経たる日華佛教交渉史斷片     | 墨    | 禪    | (四)  |
| 中日佛教學會設立的我見          | 大村春禪 | 醒基   | (一六) |
| 中日佛教之比較觀             | 好村春禪 |      | (三)  |
| 中國佛教歴訪記              | 墨    |      | (元)  |
| 日華佛教學會に關し太虛法師との打合せ事項 |      |      | (三)  |
| 日華佛教學會に對する中華民國側贊助者   |      |      | (三)  |
| 長安に旅しての感慨            | 結城令聞 |      | (三七) |
| 日華佛教彙報               |      |      | (三七) |
| 會誌                   |      |      | (四三) |
| 日華佛教學會々則             |      |      | (四八) |
| 日華佛教學會役員             |      |      | (四八) |
| 編輯後記                 |      |      | (五)  |





# 日華佛敎學會創立ノ趣旨

中華ト日本ノ交渉ハ千數百年ノ歴史ヲ有ツテ居ルガ、近代ニ至ツテ反ツテ其ノ關係ハ稀薄ニナツタ。近世ニ至リ少數ノ先覺者出デ、復興ヲ企テタガ、未ダ十全ノ域ニ達シテ居ナイ。之ハ兩國ノ佛敎徒ノ間ニ相互ニ往來シテ自由ニ研究シ、以テ融和向上ニ資スベキ連絡機關ガ缺ケテ居タカラデアル。

吾等ハ特ニ佛敎ガ日華ヲ結合スルニ最モ有力ナル精神的紐帶デアルコトニ鑑ミ、茲ニ「日華佛敎學會」(中國ニ於テハ「中日佛敎學會」ト云フ)ヲ發起シ、兩國ノ佛敎徒ノ多年ニ亘ル希望ニ添フテ必要ナル諸種ノ具體的事業ヲ開始スルコト、ナツタ。依テ普ク日華兩國ノ有志諸賢ノ贊助ト後援トヲ願求スルヤ切ナルモノガアル。

昭和拾年  
中華民國廿四年七月十一日

# 中華佛教視察記

會長 柴田 一 能

私今回初めて支那に参つた者として大それた事は申せないが、僅か四十日餘りの旅行であつたに拘らず、從來色々な書籍、新聞、雜誌等で想像して居つた支那と、實際見た支那とは、「百聞一見に如かず」と云ふ諺のやうに、僅かに一見に過ぎないけれども、その一見が非常に私の心を動かしたのである。此の事實から考へて、必らずや諸君にも早かれ遅かれ支那の見學、視察をお願いしたのである。

私は唯外面に現はれて居るものだけを見、ホンの上ツ面だけを通つて來た觀察にすぎないから所謂皮相の見であつて、深く支那の國民性を研究し、數十回支那を往復された支那通から見れば、固より本當の處を擧げてゐないに相違ない。東京出發前に後藤先生の「支那通」と云ふ本、この書を唯一の水先案内とした。「通」と云ふ中にも三義ありと申して、後藤先生のやうなのは本當の支那通、私の四十日餘り行つたのは通り一遍と云ふ通——一遍だけ通つたと云ふ通、第三には藤井草宜君のやうに度々支那に通ふ——三遍でも五遍でも通ふと云ふ通で、「通に三義あり」と云ふ事を聞いたが、一遍通り通つて來た私でも、四十日間全部を視察に當てるなれば、多少の御報告が出来たかも知れ



ないが、それさへも出来なかつたのである。といふわけは山東省の青島には毎年、佛教聯合會、佛教青年聯合會、佛教婦人聯合會——青島の五宗派、六箇寺所屬の青年會、婦人會がその宗派を論ぜず、五宗派の青年會、婦人會が聯合して四年前から佛教講習會を開催し來つたのである。今年は日蓮宗が講師を出す番に當つてゐた所、私が昨年誤つて佛教の國際會議の會長となつたために、支那にまでも私の名前が知られてゐたらしいので、その結果、聯合會でも、あの柴田一能師なら、異議なしとなつて、白羽の矢が飛んで來たやうな譯である。それで何んとか繰合せて來て貰ひたいと青島蓮長寺の大橋玄妙師から書面もあり、遂にその熱心にほだされて參つた次第であつて、多數有志の見送りを受けて勇ましく東京驛を出發し、神戸から長江丸に乗り最初塘沽に上陸しそれから汽車で天津に着いて、そこで四日間居つて北支の空氣を吸うてゐた。

## 二

天津から北平<sup>ぺいピン</sup>に行つた。悲しい哉今は北京<sup>ぺい京</sup>とは言はないで北平——これは實に何んとも云へず寂しい氣がしたけれども、實際見るに足るものは、何んと云つても北京即ち北平であります。これ又滯留四日間であつた。

北平を一番北の打止めとして南に下り濟南<sup>ちんなん</sup>に行き、それから折角の事であるから、是非曲阜<sup>きよく</sup>——孔子聖人の生れた處で、今もその七十七代の末孫孔德成君が健在であると云ふ事で、曲阜に行つて會見する事になつた。

更に泰安<sup>たいあん</sup>まで戻つて中西旅館と云ふのを見付け、これは案外！日本人の旅館がある、有りがたいと思つて行つたら中西旅館と云ふ支那人の旅館で、其處で南京虫にさんざん御馳走をしてしまつた。翌朝轎を雇つて泰山に登り、初

めて山を語る資格を得た譯である。この泰山と佛教との關係を何かに書いてみたいと思つてゐながら其のまゝになつて居るが、そのうちに私の見た「泰山と佛教との關係」に就て諸君の高教を仰ぎたいと思つてゐる。何しろ表面だけの事で何等御參考になるやうな事もあるまいが自分の氣のついた點を發表してみたいと思つてゐる。泰山を下つて再び濟南に歸り、それから青島に二週間逗留した。御存知の如く青島は日獨戰爭の結果十年間を軍制を布いてゐたと云ふ事で、青島の支那人は、日本人の實力を眞實に知つて居るので、極めて従順であるやうに見へた。七分が日本、三分が支那、七分三分の兼ね合ひと云ふやうな感じで、青島なら此のまゝ永住してもいいと云ふ氣持になつた事から察しても、二週間の間如何に持てたかと云ふ事の想像をして頂きたい。更に慰勞會と云ふ事で加藤島と云ふ港内の島に船をよせて、一日ピクニックに案内され、加藤島の植込の日蔭に蘆を布き、山海の珍味を盛つた辨當を開いて談笑したことでした。

## 三

青島を發つて海路上海に向つた。船よりも陸を行つた方がと云ふ事であつたが、何しろ切詰めた日程であつたので、與へられた豫定通り正直に船行としたのである。上海十二日間の滯在中陸戰隊や在留民に對する色々慰問の講演とか上海事變殉難者の墓參とか、それに日華佛教學會の特派員と云ふ肩書の下に、日華親善佛教使節と云ふやうな使命もあり、これは無論國家として外交上、政治上からドンドン工作を進めてやつて貰はなければならぬけれども、政治上であり外交上であるだけに、今日尙ほ傳統的精神を持ち續けて居る支那であるから、向ふの人の意見をも段々聽

いてみた上でなければ輕々にはやれない。實際中華の要人と云ふ程の要人には會はなかつたが、その代りに李鴻章の息子さんと云つても五十九歳の立派な紳士で、李經邁と云ふ方、これは大槻茂と云ふ報知新聞の特派員で且つ日蓮宗の信者が、李經邁さんと豫て懇意にして居つた所から、今度日蓮宗の柴田一能と云ふ坊さんが来るのであるが、日清戦争の勇士であると云ふ事を紹介したらしい。實は日清戦争の一方の大立物は俺の老爺だから、さう云ふやうな因縁の上からも是非その古勇士に會つてみたい。是非紹介しろと云ふ事になつた。大槻君もとんだ事を言つたわいと後悔したらしいけれども、私に何とか都合しろと云ふ事になり、一晚泊りで杭州に行く筈の處を日歸りに縮めて、時間を拵へ、丁度九月七日の日に李大人の本邸を訪ねたが、實に壯大な邸であり、殊に長男の方の李國超君も立派な若紳士で、最近結婚して新家庭を造られ、貴公子とは斯ふ云ふ人を言ふのだらうと、男ながらも見惚れて居たやうな譯であつた。十月の下旬にこの李鴻章の孫に當たる新夫婦が日本の「紅葉」を見に來られる譯で、その時には御馳走になつたお禮に何んとかして案内するつもりで居る。さう云ふ思ひ掛けないやうな慶びもあつた譯けである。この李經邁と云ふ人は聞けば青年時代、亞米利加の大學を卒業し、英語も非常に流暢であつて私も古いながら英語で話をした。支那語は日清戦争の時、少しばかり覺えたが、爾來四十年も經つてゐて通用覺束ない。この十月には子供が御國に参りますから何分宜しくと云ふ事で態々その子息を呼んで俱に食卓に就かせられたと云ふやうな事もあつた。細かい話をする時間がないから割愛するが、實は廬山に往けば政治上の要人にも會へるし太虛法師にも會へるだらうと思つてゐたが、泰山に登つたり、青島に二週間を費したりして居るうちに廬山は散會になり、太虛法師も浙江の自分の住職寺の方に歸つたと云ふ事——太虛法師は日本佛教にも非常に理解があり、今春好村君、墨禪法師も會見してゐるので、

私も是非會見したいと思つたが、時間がなくて遂に残念乍らその機會を得なかつた。

上海では非常に阮鑑光氏にお世話になつた。阮氏は現在上海の鐘紡の公大、第二工場の支那の職工を訓練、指導する役目を持つて居られる。阮氏は嚮の李大人の話と同じやうに、世が世なら我々は容易く傍にも寄れない程の良い地位を得て居る人だとのこと。阮君は非常な佛教の篤信者であるが私と固く握手をして、其の喜びを新たにせられたのであつた。

#### 四

上海に居る間に文人墨客の必らず訪づれると云ふ蘇州へ行つた。専門の畫家には杭州よりも蘇州の方が價值があると云ふ事で、現に歸路上海丸で京都の若狹物外先生と同室となり、記念として、「千里横行」とでも言ふべき大な蟹の一枚色紙を書いて貰つた。この畫伯も矢張り後藤先生のやうに、支那服を着て、純粹の支那の風土人情を繪にするために度々渡支されたのである。所が支那服を着て居た爲に、支那の巡警に怪しまれ、いろいろうるさく訊問の揚句手帳など一切取上げられたが、軍事探偵ではないと云ふ事で、放免されたけれども、それで嫌になり、急に止めて歸るのだとの事であつた。私は青島で支那服を拵へて、船中で着用し、歸朝後も、それを着用に及んで方々へ挨拶に行つた譯である。何處に行つてもよく似合ふ、よく似合ふと、褒められるので、これは何うしても支那に因縁が深いのだなと思つた。出来るならばもう一遍、イヤ何度でも行きたいと非常に支那に關心を持つやうになつた。

従つて佛教視察と言つても、右様な忙しい旅行で、雜用を足しつゝ北は北平南は南京の間を唯鐵道で往來したに止



まり特別に佛教使節の任務を遂行する事は出来なかつた譯だが北平では法源寺の梵月和尙に會つた。その先代は支那切つての學者と評判された道階大和尙と云つた人で、大分著書も出て居るとの事、その後を繼いで居る梵月和尙も、北平の廣濟寺で唯識の講師をして居ると云ふ事である。その弟子と見る可き七八十名の中に滌塵と云ふ青年僧があつた。日華佛教學會で世話をしてゐる釋墨禪君の紹介で、私が天津に着いた時に手紙が着いて居つて、是非ともお目に掛りたい、今から楽しみにして待つてゐます。北平着の折停車場にお迎へする筈であるが、法要のために出られないが惡からず云々と、實に鄭重な言葉で書いてあつた。其法源寺に行つた處が、梵月和尙が非常に待遇してくれ、その青年僧にも會ひ、是非日本に留學したいと云ふ熱心の溢れた志願書を書き和尙が判を押したものを持つて來たが、學會の方でも履歷書を見て、これは將來見込みがあると云ふので明春から留學を許す事になつた。

## 五

其翌日有名な喇嘛寺に詣り、丁度百二三十名の僧が法要中であり、いゝ處に來合せたと云ふ事であつた。昨年日本に來た印度のナーラダ、ラフラと云ふ學僧が支那に渡り、丁度上海で研究して居つた。世界佛教居士林と相並んで有名な佛教淨業社、これは有名な佛教團體であつて、王一亭居士の居士林とは違つて社交的の意味を持つて居る團體であつて、關炯氏が副會長をして居り、日本にも留學した人で、英語も頗る流暢であつて、私の肩書が日蓮宗管長代理とある所から、日蓮宗に關する質問續發し、例へば日蓮宗は法華經に依つて建てられたものであると云ふと、天台大師の法華經による宗旨は既に支那にある。傳教大師が支那に來てそれを學んだのである。それと是れとは



どう違ふかと云ふやうな事の質問を受けた。天台と日蓮との相違如何と云ふ質問は至る處で受けた。それから上海清涼寺を兼務してゐる清海大和尚——この人は常州の本寺清涼寺が建築中であるので、時々上海に出張され、丁度この時に滞在中で、今晚夜行で常州に歸ると云ふ矢先きをお目にかゝることを得た。其處で日、印、支——印度を代表してナーラダ君、支那を代表して清海大和尚、日本を代表して不肖柴田一能——三國の會同が實現した譯である。それから普光と云ふ人に會つたが、この人は長崎で多少日本語を習つたと云ふ事で、この人に會つたのは不幸ではなく極めて幸福であつた。この青年僧は法華經の研究に熱中し、これが終つたら日本に行きたい日本にも法華經を所依した宗旨があると云ふ事を大槻君から聞いて居つたので是非貴下にお目にかゝりたいと思つて居たが、幸ひ師匠の清海和尚と共にお目にかゝつて嬉しいと和尚を紹介してくれた。當年七十二歳の見上げるやうな大和尚で、破鐘の如き大音であつて臨濟宗の和尚である事が判つた。若し一喝食はされたら慄へ上つてしまひさうな氣がした。圖らずも日、印支の大會とは言へないが、小會位は慥かに開かれた譯であると云ふ事で、大笑の中に閉會した。

中華民國の現在及び將來を考へると矢張り大乘佛教の精神で現在の中華の國難を——國難は日本だけの事ではない——拯はねばならない。それには日華佛教徒が、佛教と云ふものを土臺にして精神的親善の途を開き、東洋平和の大事業に餘程の努力をしなければならぬと感ずる次第であつて、日本佛教の責任も決して輕々しいものではないと思ふ。深かい事は知らないが、私の見た中華佛教の状態では容易な事ではないと思ふ。さうかと云つて手を着けないでおけば何時まで經つても社會生活とかけ離れた山林佛教か、然らざれば道教化した墮落的市井佛教の脚を洗ふことは出來

# 四段階を経たる日華佛教交渉史斷片

藤井 草宣

## 一、三國同盟の提唱

日支兩國の鎖國の夢破れ、兩國の交渉が漸く再開されんとする明治六年（同十二年）、東本願寺の僧小栗栖香頂が、大志を抱いて上海に渡り次で北京に到つて、日支印の三國は、偕に佛教國なれば、三國同盟して以て、西力の東漸を防止せんといふ大理想案を提唱した。不幸にして時機到らざれば、小栗栖は北京龍泉寺本然について専ら北京語を習ひ、又た別に喇嘛教の研究を行ひ、且つ五臺山に登嶺して翌年歸國した。是れ光輝ある「日支佛教再交史」の第一段階である。

## 二、清國開教の決行

小栗栖が、歸國後の一ヶ年間に準備した計劃は何であつたか。即ち「清國開教」これである。彼は「北京護法論」一冊「喇嘛教沿革」三冊及び漢譯の「真宗要旨」の三書を著した。その一と二とは日本國內の有志に對する報告と宣傳であり、その第三は正しく清國開教の教科書であつた。東本願寺法主及び石川舜台と外務卿寺島宗則は正しく彼の

良き後援者であつた。明治九年夏、上海英租界北京路に於て「上海別院」開院式が行はれ來賓として、日本領事、日本居留民と支那の僧侶、儒者、官紳數百名が之に列席した。次でその九月には江蘇教校を別院内に開設し、日本より派遣せる青年開教使を養成することとなり、又た一方に同じく居留民の爲めに育嬰堂を開設して之に簡易小學校を附屬せしめた。翌十年には谷了然は北上し、北京皇覺寺内に直隸教校を創立し、大喇嘛章嘉浮圖克圖と提携して蒙古、滿洲の開教を志したのである。この計劃の實行は、實に明治十九年の荒尾精の漢口樂善堂の事業にも先行するもので、たゞに佛教運動のみならず、日本の對支文化事業の第一聲第一着手であつた。

又た明治三十一年に及べば、福建省廈門の東本願寺教堂加藤廣海の事業及び漳州、泉州、淡水等の布教状態は相當に進んでゐた。三十二年（光緒三十五年）には、東本願寺は、杭州日文<sup>にち</sup>學堂、杭州開導小學校、南京金陵<sup>きやう</sup>東文學堂、蘇州文學堂、などが成立し、頗る活氣あるものがあつた。又た曹洞宗の僧水野梅曉は、上海の東亞同文學院を卒業するや直ちに天童寺住持敬安と計つて、明治三十六年春、湖南の南岳の長者笠雲を訪ね、長沙に「湖南僧學堂」を開設した。然るに之らは何れも、時局のため數年にして中止のやむなきに至つた。そして、後は、居留民の葬祭に任ずるの僧侶が、残るに過ぎないこととなつた。爾來今日まで、徒らに開教の名は存して、その實は失せたのである。以上が其の第二段の歴史である。

### 三、布教權問題の被害

その後につつたものが、外交談判による内地布教權獲得の企圖であるが、これは大正四年（民國四年）の事件とし

て、失敗に歸した。それが後に遺したものは、支那が日本佛教に對して永く猜疑の眼を以て見るに至つた大害である。これその第三段である。

#### 四、東亞佛教大會の決議

而して、最後の解決は示された。それは、その後十年間に、支那に於ける佛教界には、僧侶及び居士の中に幾多の新人が輩出した、確かに佛教復興の見込がある。依つて彼らをして驟起せしめ、支那の佛教とその佛教史蹟寶物を保護せしめ、而して彼らをして支那民衆を指導せしむることが可能であるといふことが分つたので東亞佛教大會の開催となつたのである。これその第四段の歴史である。大會は大正十四年十一月のことであつて、約三十名に近い支那佛教徒が参加し、之に臺灣朝鮮等からも十餘名の参加者があり、日本佛教は十三宗五十八派を擧げて熱誠をこめ、東京の増上寺で開會した。當時の各部の決議を一覽せば、

##### 一、教義研究部決議（部長木村泰賢）

1、交換教授（各宗最高學者の來往）

2、交換研究（文書交換）

3、交換學生（語學及専門）

右説明——要するに、今後は學問的に日華兩國を聯結した、純粹なる佛教々義の研究に關して、相互に握手したいといふ考である。勿論今後に於ける學問は、凡て一國のみで出来るものでない。國際的に行はなければ佛教の研究